

## 樋口平大夫と但称の作善

川 勝 政 太 郎

### 一、序 言

もと洛西鳴滝の音戸山の上に、松林に囲まれて五智如来の大きい石仏を中心に数多くの石像があった。往年私は京都美術大観『石造美術篇』（昭和八・五）に五智山石仏群として解説を書いた。五智山はそこにあった蓮華寺の山号であると同時に、地名にもなったのである。寺は昭和三年に山を下り、御室仁和寺の東側の現在地に移って今日に至っている。久しく石仏群は山上にあったが、これも昭和三十三年五月に現在の蓮華寺境内に移され、四十九年の今春、不動石仏を奉安する御堂が新築され、境内の整備が行われた。

蓮華寺自体の寺伝としては、平安時代に嵯峨大覚寺の東北に、蓮華峯寺が建立され、応仁の乱による焼失のあと鳴滝音戸山上に移ったが、その後荒廢していたのを、江戸時代はじめに江戸の豪商樋口平大夫が再興し、今日の蓮華寺となったと説く。

石仏に刻まれた銘文によると、寛永十八年（一六四一）に、伊勢の生れで武州江戸の住人である樋口平大夫家次が願主で、石仏の作者は但称である。但称は但唱とも書かれ、木食行を重ね、多くの仏像を刻み、寛永十二年（一六三五）に江戸芝高輪に帰命山如来寺を開いた。如来寺は泉岳寺に隣接し江戸の名所であったが、明治四十年に品川区大井伊藤町に移り、大井の大仏とよばれて現在に至っている。東海道新幹線で品川の辺を通過する時、整備された堂宇が近くに見下ろされる。

五智山の石仏が山下に下ろされた時、大日如来の座下に埋められていた大きい甕から、平大夫が造立にあたって納めておいた願文所刻の五枚の金銅板が見出され、そこに刻まれた文章によって、平大夫の仏教信仰心のきわめてあつたことを目のあたりに見て、私は以来平大夫と但称の事跡について深い関心を持つに至った。

その後十五年が経過したが、その間に若干の資料に出会い、蓮華寺、如来寺に何度か足を運び、特に平大夫の事跡について知るところが増加した。まだ探索をつくすべきではあろうが、一応現在の段階で、この二人の作善について記述し、仏教篤信者たちの人間像を浮かべ上らせたいと思う。

## 二、平大夫の諸国順札

樋口平大夫の名の見える遺品の中で最も古いのは、岩手県平泉の中尊寺に所蔵される鍍金銅板の納札である。私がこれに気がついたのは昭和三十五年三月一日、当時大阪の大丸で催されていた中尊寺秘宝展に展示されていた時である。平大夫について関心を持っていた私には、まことにありがたい資料なので、会場に出張されていた中尊寺の千葉快恩師に事情を説明し、写真を作って頂くことをお願いし、その日は心ゆくまで拝見した。その金札は竪二四・七センチ、幅一八・五センチの長方形で、周囲に八個の釘穴があり、文字は七行にわたり、大体一行十三字前後で、籠字線彫りにしてある（第一図）。その文は

生国伊勢只今武州江戸日本橋

材木町住御当山始而参詣之時分

御宝前難有奉拜六親眷属七世

父母有縁無縁草木国土悉皆

成仏為二世安楽金札奉納者也

南無高館中尊寺光堂樋口平大

寛永伍<sup>戌</sup>辰<sup>辰</sup>年<sup>辰</sup>今<sup>辰</sup>月<sup>辰</sup>日

家次（花押）

とある。寛永五年（一六二八）に平大夫はじめて中尊寺に参詣した時のもので、高館は今の平泉中尊寺の古くからの地名である。光堂は一般に阿弥陀堂のことであるが、ここでは有名な金色堂を指す。樋口平大夫家次と記して、平大夫の夫を省略し

樋口平大夫と但称の作善

第一 図



ているが、以後にもこの書き方が多い。

金札奉納とあるように、昔の霊場順札者は参詣の印として自身の願意を記した札を納めたのである。札所という言葉が霊場の代名詞として用いられるのは、その意味である。紙札・木札・金札など素材はちがうが内容は同じで、高価につくのは金札である。江戸住の平大夫が奥州高館まで行くのは遠い旅であり、当然道々の霊場を順札したのであるから、何枚もの金札を用意していたにちがいない。そうした費用の支出に堪える境遇の人であることが知られる。金札は釘で打ちつけるもので、釘穴もはじめからあけてある。この金札を現在では超国宝級の金色堂のどこかへ釘で打ちつけたのであるから、今の常識からはとんでもない行為であるが、昔の人の信仰心は次元がちがうのである。なお現代のような交通機関の発達によって、出発時から到着時までを予定できる時代ではないので、いつ参詣できるか予定が立たない。従って金札に月日まで前以て彫刻しがたいから「今月今日」と書いてある。こういう書き方は昔よく使われている。

平大夫は、伊勢国の生れで、現在は武蔵江戸の日本橋材木町に住んでいると記してある。後に示す京都の五智山蓮華寺の鐘銘中に「樋口平大夫家次者勢州三宅郡之生縁也」とある。現在の三重県多気郡多気町佐那の辺が、昔の三宅郷に当ると、吉田東伍博士の地名辞書に見える。松阪市の南一〇キロばかりである。江戸の日本橋材木町は今の日本橋の東南の辺りで、南北に通じる堀があり、これに沿う町が材木町である。一丁目から八丁目まであって、各町の間小溝七か所を設け、材木の浮繋にあてたと、同じく地名辞書に記されている。ここは隅田川が東京湾に流れてむ辺に近く、材木問屋の集った地域である。平大夫が材木町の住というのは、材木問屋を営んでいた公算が多い。伊勢から江戸に出て成功した豪商であろうと推定するが、今後の資料の出現に待ちたい。大方の御教示を願うものである。

中尊寺へ参詣した寛永五年に、平大夫は越後国の弥彦大明神にも金札を打っている。新潟県西蒲原郡弥彦村に鎮座する名社、弥彦神社である。同社所蔵の重文大太刀（応永二十二年）の朱漆塗の鞘口を後に補修のため流用した金銅板の残欠があり、それに籠字で線彫りした六行の文字が残っていた。

生国伊勢只今武州江

材木町住御当山始而参

御宝前難有奉拜六

世父母有縁無縁草

成仏為二世安楽金札

南無弥彦大明神

とあり、旧文部技官で刀剣担当の辻本直男氏が、中尊寺宝物館にある前記の平大夫の金札との共通に気付き、これも平大夫の納札であることを認められたのである。<sup>(注一)</sup>

注一、『新潟県の文化財』弥彦神社の部

弥彦神社の分は金札の下方と左端を切り取ったものであるが、その文は中尊寺のと全く同じく、奉納宛名が「南無弥彦大明神」となっているだけのちがいで、左端には同じく寛永伍<sup>辰</sup>年<sup>戌</sup>辰年<sup>辰</sup>今月今日と平大夫の記名があったことが考えられる。おそらくこの年に平大夫は、奥州から北陸へと順礼したのであろう。

あくろ寛永六年（一六二九）の平大夫の金札が、北関東の二霊場にあることが知られた。その一つは上野の白岩観音に納めたものである。群馬県榛名町白岩の長谷寺のことで、坂東観音霊場第十五番の札所となっている。近年発行された平幡良雄氏の『坂東三十三カ所』にのせられた写真によって、平大夫の金札のあることが知られた。最近私は白岩観音に参詣し、古い霊場の空気に接し、金札を実見することができた。竪一センチ、幅九・九センチで、頭部は山形に作られる。刻文は籠字で

生国伊勢今武州江戸日本橋材木町住

御当山始而参詣時奉拝殊勝七世父母

六親眷属有縁無縁草木国土悉皆成

仏為二世安楽奉納金札願主樋口平大

但三十三番ノ内（この七字は線刻）

寛永六<sup>巳</sup>年今月今日 家次（花押）

とある。前掲の中尊寺光堂や弥彦神社のをわずかに簡略し、奉納先の寺名が入れてない。どの社寺にも納められるようにしたものである。

樋口平大夫と但称の作善

今一つは早く雑誌「武蔵野」十三巻二号（昭和四・二）の矢吹葉人氏「三峰神社の金石文」に採録されたもので、竪二〇センチ、幅七センチの銅板で、刻文は右に掲げた白岩観音金札と全く同文である。同じ時に作らせた何枚かを持って、北関東を順礼したことが知られる。三峰神社は埼玉県秩父郡大滝村の三峰山頂の古社で、金札は本社の左側にある旧本殿であったという建物の、右側の虹梁の下の辺に打たれてあったのを、矢吹氏が採録されたので、打ちつけられた状態で残っていたことが珍しく、また資料的にも重要である。今でこそケーブルカーがついているが、山麓から六キロの山頂を往復した古人の信仰の厚さが思われる。

ここに興味のあるのは、平大夫が所持していた護身のお守が、かつて京都の杉浦丘園氏のコレクションの中にあつたことである。それは特に近世江戸初期ごろに諸方で開板流布した「九重の守」というもので、竪八センチばかりで長巻のものであるが、巻物は直径二・五センチほどで掌に握りこめる大きさである。内容は梵字曼荼羅、梵文真言、仏菩薩らの図像を多く集めて木版刷にしたもので、それを所持信仰する人は悪事災難をのがれるという。（注二）

注二、川勝「九重の守と福德寺の版木」（史迹と美術四四七号、昭和四九・八）

杉浦氏所蔵本は日下無倫氏が雑誌「日本仏教史学」創刊号（昭和一六・八）に発表された「九重御守の流伝と開版の種々相」の中で紹介されたもので、巻末に左の如き刊記と、墨書の奥書がある。

（刊記） 右之板者於武蔵国江戸神田大明神所塔建立之沙門湯殿山一世之行人天入開板之

于時寛永六天<sub>己</sub> 天曆二月吉日

（墨書） 御守為熱灼樋口平大家次（黒印）

この刊記によると、平大夫の居住地から四キロばかりにある江戸人の信仰あつた神田明神において、出羽湯殿山の行人が開板したもので、この九重の守はおそらく争い求められたものと思われるが、信仰心の深い平大夫がこれを受けたことは当然である。奥書は所有者の平大夫が書いたもので、熱灼のためにこのお守を持つとはどういう意味であろうか。その当時平大夫は高熱の病にかかったのかも知れぬ。

杉浦丘園氏とは私は特に懇意にして頂いていたが、平大夫所持の九重の守に気がついた時は、杉浦氏他界の後で、実物を拝見する方法もなく、それが現在どこへ行ったかも知らない。残念なことをしたと思う。

寛永八年（一六三一）に平大夫は再び中尊寺に金札を打っている。これも中尊寺に保存され、堅二一センチ、幅一〇センチ、頭部山形に作り、文字は籠字である（第二図）。その文は

生国伊勢武州江戸住一國六十六部

經納罷通時奉金札打七世父母六親

眷屬有縁无縁蠢動倉靈草木国土

悉皆成仏二世為安樂右如此也

寛永八年辛未年今日 樋口平大夫次（花押）

とある。奉納先の名を入れない普通品であるが、寛永六年の白岩観音の時のものとは、少し文がちがう。それはこの金札が霊場順礼の時のものではなくて、日本六十六国をめぐる、一國一か所に法華經を納めて歩く六十六部の廻国の途次に、中尊寺に再び参詣したことを示しているのである。六十六部廻国では、出羽湯殿山と陸奥塩竈のコースの間に中尊寺がある。（注三）

注三、奥村隆彦氏「六十六部聖のこと」（史迹と美術四四五号、昭和四九・六〇）

現在の私の手許の資料では、平大夫の金札遺品はこれ以後しばらく見出されていないが、西国三十三所、坂東三十三所、秩父三十四所の百観音霊場、日本六十六国、各地の霊場をめぐることをつづけ、次に記すようにそれが寛永十七年（一六四〇）までに完了したのであるから、少くとも平大夫は十二年間、その事に没頭したのであろう。従って彼の納めた金札はまだどこかで発見される可能性がある。

### 三、五智山石仏の造立

現在の五智山蓮華寺は京都市右京区御室大内に所在し、仁和寺の東側に前面を広い駐車場として、後方一段高く五智如来その他の石仏群を安置し、その東北に新建の不動堂の偉容を拝する。石仏群は音戸山上にあった時と同様に前後二列に並べてある。

前列の五智如来は花崗岩製の大きい基壇上に並べられ、各花崗岩製の八角形反花座を設け、反花座の側面には丸に三つ葉の紋を彫刻したもの

樋口平大夫と但称の作善

第二図



樋口平大夫と但称の作善

がある。その上の三段鱗葺の蓮座と仏体は安山岩製で灰黒色を呈し、仏像は完全な丸彫の坐像である。総高約二・七メートルの大きい石仏で、近世のものとしては優秀な彫刻である(第三図)。向って右より

薬師如来(両手で薬壺を持つ) 左膝背後に「作但称(花押)」

宝生如来(頭指を立て他の指を組む) 同上

胎蔵界大日如来(宝冠を着し、法界定印を結ぶ) 同上

阿弥陀如来(弥陀の定印を結ぶ) 同上

釈迦如来(法界定印を結ぶ) 同上

後列は十一体で、いずれも安山岩製、光背や像の背面、または台座の表に刻字のあるものがある(第四図)。向って右より

尼形坐像(合掌、平大夫の母像)

〔台座表〕 母妙珍

樋口

平大夫

家次(花押)

地藏立像(右手錫杖、左手宝珠を持つ)

〔像 背〕 樋口平大夫家次(花押)

作但称(花押)

僧形坐像(合掌、平大夫の父像)

〔台座表〕 天正十三

第三 図



三月

父梅岳

道春

樋口

平大夫

家次

立之

聖観音坐像（右手与願印、左手蓮茎を持つ）

〔光背々面〕

願主岡村庄兵衛清之（花押）

寛永十八天<sub>巳</sub>作但称（花押）

僧形坐像（合掌に珠数をかける、平大夫像）

地藏立像（右手錫杖、左手宝珠を持つ）

〔光背々面〕

寛永十八<sub>巳</sub>年

願主本国伊勢之生武州江戸樋口平大夫家次（花押）

月日造立之作但称（花押）

僧形坐像（合掌に珠数をかける、但称像）

〔台座表〕

願主

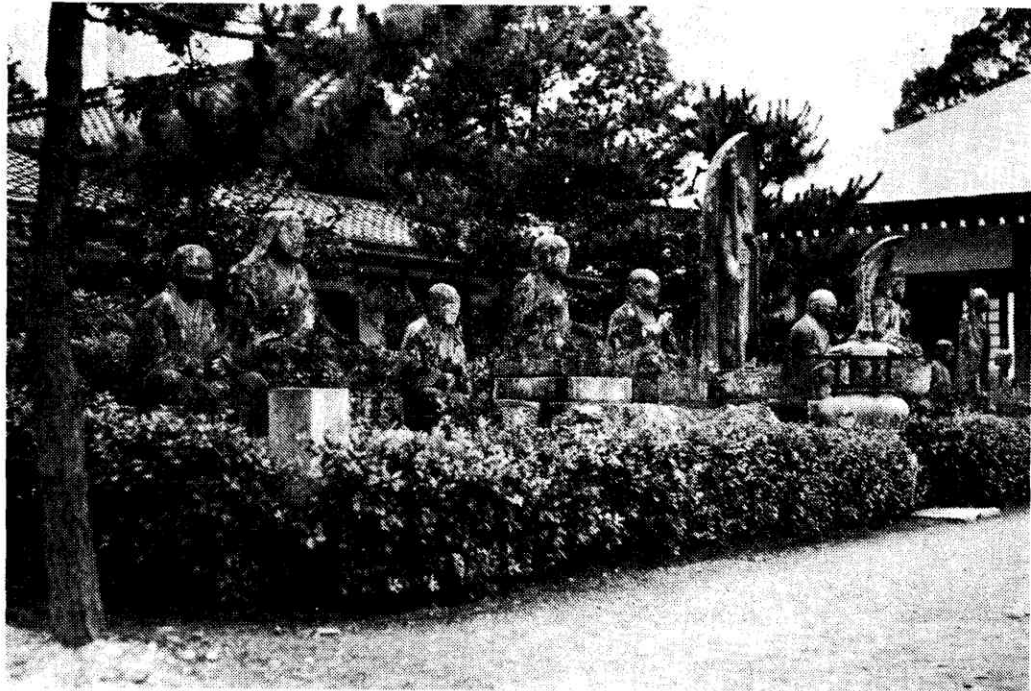
心翁常信

仏性院

但唱上人

樋口平大夫と但称の作善

第 四 図





樋口平大夫と但称の作善

弟子

林貞作

僧形坐像（右手五結杵、左手珠数を持つ、弘法大師像）

僧形坐像（左手に払子を持つ）

優婆塞形坐像（頭巾をかぶる、役行者像）

僧形坐像（両手拳を作り膝上に置く）

さらに不動堂に安置する本尊も一連の像で、安山岩製、

堂内奉安のため保存がよい。

不動明王坐像（右手劔、左手索は後補）（第五図）

〔像 背〕 作但称（花押）

これらを通じて見ると、寛永十八年（一六四一）に平大夫はこの多くの

石仏を音戸山に奉安したのであるが、五智如来の他に不動明王、地藏、観音、弘法大師像などを造立し、また両親、自身、石仏作者の但唱（但称とも書く）の肖像まで作ったことは、この石仏群が平大夫一生涯における重要な意味を持つものであることを物語る。石仏の作者はただ一体但唱像を弟子の林貞が作った他は、ほとんど但称作と署名を入れている。しかし実際は但称と弟子たちが作ったものと理解すべきであろう。そうした意味において、林貞の名がここにただ一つ存在することは、資料として貴重である。但称上人については、後に改めて述べる。

以上記したところだけでは、樋口平大夫が石仏群造立の作善を行った趣旨は明らかでないが、それが明かされる時期が来た。昭和三十三年五月二十四日、石仏群を山下におろした時、大日如来の台座下から、高さ四二センチ、胴の径三三・六センチの信楽焼の壺が一個発掘され、上に摺鉢様の陶器で蓋がしてあったが、これは破片となって捨てられてしまった（第六図）。その壺の口径は一三センチで、五枚の銅板が曲げて抱き合わすようにして、壺の中に納められ、その中心に竹の簀に写経らしいものを巻いて入れてあったが、ひどく腐蝕していたので、これは代りの壺に入れて現在の大日像座下に埋められ、信楽焼の壺と銅板五枚は取り出して別に保存されている。これらの銅板は前記の金札に比べるとはる

第五図



かに大きいもので、同じく銅板鍍金ではあるが、願文を刻みつけて大日座下に埋納するのが目的であるから、釘穴などはない（第七図）。刻字は籠字と陰刻を併用している。一部分読みにくいところもあるが、次にそれらを記すこととする。形はいずれも頭部を山形にした上下に長い板である。

(一) 竪三四・二センチ、幅一五・五センチ、全線刻。

奉納西国三十三所順礼之行者火物をたち

道中はだし夜はねず二親我札三枚づつ

奉打荷俵をおいれい社霊地納則別当社

僧手形を取こめ入納所之意趣者為二世安楽也

庚于時寛永十七年

俗名樋口平大夫家次（花押）

辰 六月廿五日 願主生国伊勢武州江戸心翁常信居士

(二) 竪三四・五センチ、幅一五・五センチ、全線刻。

奉納坂東三十三所順礼之行者火物を

たち道中はだし夜はねずれい社霊地

金札奉打別当社僧之手形を取此かめ

納所之意趣者為二世安楽也樋口平大家次（花押）

庚于時寛永十七年

辰 六月廿五日 願主生国伊勢武州江戸心翁常信居士 白

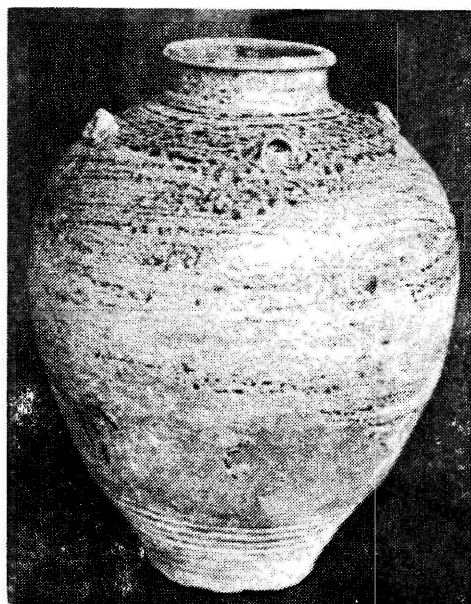
(三) 竪三四・五センチ、幅一五・五センチ、全線刻。

奉納秩父三十四所順礼之行者火物

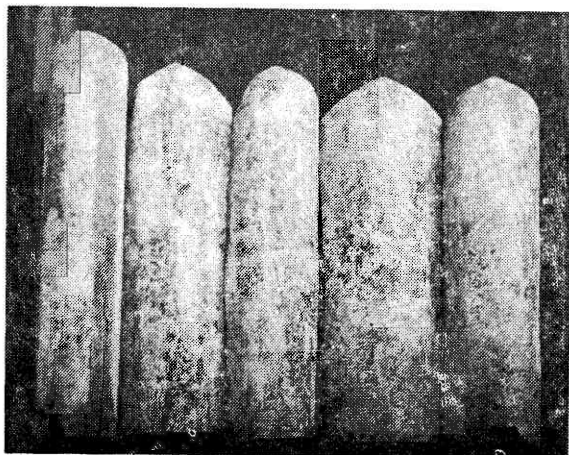
たち道中はだし夜はねず金札を打荷俵

樋口平大夫と但称の作善

第六図



第七図



樋口平大夫と但称の作善

おいいい社靈地納別当社僧之手形を取  
此かめ納所之意趣者為二世安樂也

庚于時寛永十七年

樋口平大夫家次（花押）

辰 六月廿五日 願主生国伊勢武州江戸心翁常信居士

（四） 豎三四・二センチ、幅一五・八センチ、願文部分のみ籠字。

奉供養大乘妙典六十六部之内

一 国三部者天長地久御願円

満当家將軍家光公御武運

長久国家安全所也 樋口平大家次（花押）

庚于時寛永十七年 願主生国伊勢武州江戸心翁常信居士 白  
辰 六月廿五日

（五） 豎三六・六センチ、幅二〇・六センチ、願文部分のみ籠字。

奉納大乘妙典一國六十六部為供養

五智如来□□山奉造立再妙法蓮

花経□□部仏座下奉納者□意

趣者為天下泰平国土安全別而仏法

繁昌諸願成就現世安穩七世父母六親

眷属有縁無縁草木国土後生善所也

庚于時寛永十七年 願主生国伊勢武州江戸住樋口平大心翁常信居士 白  
辰 六月廿五日

これらの銘文によって、樋口平大夫家次は寛永十七年（一六四〇）には心翁常信居士という法名を得ていること、西国三十三所、坂東三十三

所、秩父三十四所、合せて百か所の観音霊場を木食行をしつつ順礼したこと、また六十六部の廻国をして、一國に法華經を三部ずつ納めたのは、一に天子様のため、二に將軍家光御武運のため、三に国家安全のためであることが知られ、最後にこの五智山の石仏下に再び妙法蓮華經を納めて、彼の信仰の総決算をしようとする意趣を知ることができるのである。この寛永十七年六月二十五日は、平大夫のそれまでの作善の総供養を行った日でもあろう。

安置される予定の石仏は、職業仏師でなく、信仰の立場から仏像を刻むことで著名であった如来寺の但称上人に依頼をしたのである。灰黒色のこの安山岩は伊豆石で、関東においてはすでに鎌倉時代以来常用されたもので、むろん但称は伊豆の現地で彫刻を終り、海路大阪に運び、それが洛西に運ばれたものと想像できる。従って主体部は安山岩で但称一派が作り、基壇と八角の反花座は関西の花崗岩を用いて、京都の石工に作らせたのである。このように台座部と石仏本体を異った石質によって作った例は、近世にはしばしば見るところである。はじめから計画的にそうしたのである。

但称の石仏彫刻はこの十七年には開始され、翌十八年に洛西音戸山に据えつけられることになるが、それが何月と予定して月日を刻みにくいので、石仏の銘文では月日とあるだけである。

第八図



樋口平大夫と但称の作善

第九図



樋口平大夫と但称の作善

なお京都では蓮華寺以外にも平大夫造立の石仏がある。その一は右京区嵯峨広沢池観音島の十一面観音立像である(第八図)。像背の刻銘に願主本国伊勢之生武州江戸住樋口平大夫家次(花押)

寛永十八年月日造立之 作但称(花押)

とある。安山岩製、高さ一四五センチ。明治二十六年に五智山から借り出したことの明らかな一体である。次は下京区松原不明門にある因幡堂の本堂の西側にまつられている二体の石仏である(第九図)。安山岩製。向って左は金剛夜叉明王立像で、岩座の上に立ち総高一四〇センチ、三面六臂像であるが、脇手の四本が破損した。像背の刻銘は広沢池十一面観音の寛永十八年月日の同文である。向って右の多聞天立像は、邪鬼の上に立ち総高一五五センチ、左手に塔を持ち、振り上げた右手先は欠損する。像背の刻銘は平大夫の花押が破損するだけで同文である。次は下京区猪熊五条にある旧本圀寺清正公廟入口の二体で、向って右は総高一〇六センチの十一面観音、左は一八センチの聖観音で、ともに蓮座上に立ち、安山岩製。いずれも像背に「願主樋口平大夫家次(花押)」「作者但称(花押)」と刻む。紀年がないのと、「作者」としたのが今までのとはちがう。因幡堂も清正公廟も洛陽の霊場であるから、平大夫造立の石像がここにまつられることも、因縁のあることであろう。

四、晩年の平大夫

心翁常信居士という法名から推すと、五智山石仏造立の頃の平大夫は老境にあったものと思う。老境というのが今と昔ではずいぶんちがうので断言はできないが、六十才前後と見ておこう。平大夫の晩年の作善は五智山蓮華寺を再興することにあつた。それが実を結んだことは、石仏造立より四年後の正保二年(一六四五)に新鑄された梵鐘に刻まれた文によって知られる。この鐘は失われて現存しないが、幸にして江戸時代に岡崎信好の編した『扶桑鐘銘集』巻之二に刻銘が採録されている。撰文したのは五智山に近い花園妙心寺にいた雲居禅師希膺である。この人後に奥州松島瑞巖寺に入ったことで知られる。鐘銘は甚だ長いので前後を省いて必要な部分だけを引用しておく。

(前略) 大日本国平安城西、五智山蓮華寺開基之檀那、樋口平大夫家次者、勢州三宅郡之生縁也。自壮年比、発菩提心、苦修練行、積功累徳、夜不寝、昼豈怠乎。為火物断、修跣足行、巡礼西国三十三所并坂東、同秩父觀世音、自釘金札。又経行扶桑六十六箇国、一国一国経堂納六十六部妙典、而為征夷大將軍、必加三部、若非夙薰仏種、大智上根、安能如是哉、可謂濁世優曇、火裏清泉矣。到弘願成就之日、相攸於洛

西鳴滝村、彫刻大頑石、造立五智如来、而宝蓮座下埋蔵一千一百部大乘經。仍鑄巨鐘一口、以備一切衆生、有縁無縁、六時行道之資具、即借花園比丘希膺手、銘焉（中略）

正保二乙酉年仲冬良辰

平大夫自身から聞いて文を成したのである。今まで私が遺品を通じて述べた平大夫の経歴が、物の見事に記述されている。

平大夫がどうして洛西鳴滝の地を選んだのか、それを知りたいが資料がない。よほどの地が気に入ったのであろうが、江戸居住をやめて、この頃からは五智山に庵室を結び信仰生活をつづけたいらしい。その平大夫がまたも信仰の旅に出た。このことは鐘銘以後のことであるから、それには記されていない。

愛媛県松山市和氣町の円明寺は四国八十八か所の第五十三番の霊場であり、弘法大師信仰の遍路によって知られる。平幡良雄氏著『四国八十八ヶ所』（昭和四四）に、同寺の本尊厨子にもと打ちつけてあった納札のことが記され、その中に平大夫の金札があるので、久保仁平氏が調べたて資料を提供して下さった（第一〇図）。

第十図



樋口平大夫と但称の作善

第十一図



樋口平大夫と但称の作善

円明寺のこの金札は、銅板鍍金、豎二四センチ、幅九・五センチ、頭部は山形に作り、釘穴は両側に各三個ある。文字は籠字線彫りとなる。弥勒菩薩の種子「ユ」を上にあらわす。

慶安三年 京 樋口

「ユ」奉納四国遍路同行二人

今日 今日 平大家次

慶安三年（一六五〇）は五智山石仏造立のあと九年である。平大夫はおそらく諸国霊場をめぐりながら、四国の弘法大師八十八か所を順礼していないことを残念に思っ、この年に遍路に出かけたものにちがいない。同行二人とあるのは一人の旅であることを示す慣例になっている。この四国遍路によって平大夫の信仰は完全の域に達したといつてよからう。この時「京樋口平大家次」と書いているように、京の住人になり切っている。

五智山上から蓮華寺境内西方に移された平大夫の墓がある（第一一図）。三段積の台石の上に立つ自然石で、表面の輪郭内に

明暦元年

「ア」心翁常信居士

六月八日

とあり、別に「慶安四年八月十五日起立之」と刻まれている。慶安四年（一六五二）、即ち四国遍路の翌年秋に、平大夫は寿塔としてこの墓を立て、四年後の明暦元年（一六五五）六月八日に没して、その命日が追刻されたのである。なお蓮華寺の位牌には、平大夫の没年は寛永二十年（一六四三）六月八日になっている。右に述べた四国遍路の慶安四年（一六五〇）に生存していたのであるから、これは何かの誤りであろう。私の推察するところでは、明暦元年が乙未の年で、寛永二十年が癸未の年であるから、未の年一巡（十二年）を誤って寛永二十年という位牌が作られたのではなからうかと思う。

平大夫が晩年の大きい作善としての石仏群造立、蓮華寺の再興は完成し、承応二年（一六五三）版「新改洛陽並洛外之図」の地図に「五智山」の標記があり、平大夫没後三十年の貞享二年（一六八五）刊『雍州府志』に

第十二図



樋口平大夫と但称の作善

蓮華寺 旧仁和寺之別院而在鳴滝村西山、然廢壞年旧矣、明曆中江城富人樋口某造立五智如来石像、安置山上、令新義真言宗僧權大僧都尊祐住之、寛文十三年乘田又再興之、民間多不識寺名、直称五体仏と見え、蓮華寺が江戸の富豪樋口により再興されたことを記している。五智山は以来密教の学僧が次々に出て世に知られたのである。

五、如来寺開山但唱

但唱（但称）は摂津有馬の人とも、多田の人ともいわれ、美作国檀特山の弾誓仏という行者の弟子となり、木食行を重ね、諸方を遊歴して、土地の人々の帰依を受ける反面、権力の迫害を受けつつ、その間に仏像二万體彫刻の悲願を成就し、寛永十二年（一六三五）に江戸芝高輪に帰命山如来寺を開いたという。

現在地は品川区大井伊藤町であるから、大井の大仏とよばれるのであるが、今では東京人も江戸名所としての如来寺を忘れている。大きい本堂内には木造の五智如来の巨像が並んでいるが、但唱作のものは焼失し、右端の薬師如来の首だけ古いのが但唱作仏のなごりかも知れない（第一二図）。堂内左方には但唱の合掌像が厨子内に奉安されている。



樋口平大夫と但称の作善

今本堂外に立っている二体の地藏石仏に、但称作の銘がある(第二三図)。ともに安山岩製、向って右の像は上部が折れて地上に落ちているが、総高二四二センチ、光背々面に次の刻銘がある。

淨清 妙蓮

淨安 妙春

奉加衆 淨貞 妙西

寛永拾四年 道喜 淨円

奉建立地藏菩薩 道衆 永西

作者但唱 妙順 定念

四月廿四日 妙西 妙讚

妙心 妙清

向って右側面に「施主石屋、和泉屋半右衛門」と見える。寛永十四年(一六三七)に石屋が施主となり、十六人の奉加の人たちが参加して造立されたもので、但称の五智山以前の作の一つである。

左の地藏は合掌の形で、総高二二二センチ、光背々面の刻銘に

于時寛永十五年

五智如来大本願為千品甚右衛門内方

奉從靈巖嶋新堀町中此供養也

戊寅二月廿九日 作但称(花押)

とあり、翌年の造立で、供養をした靈巖嶋新堀町というのは、樋口平大夫の居た材木町からすぐ東の隅田川々口の中島である。当時但称の如来寺は芝高輪にあったので、日本橋材木町や靈巖島は六キロばかりの距離で、その辺の住人が如来寺に親しんだことが考えられる。これらの地藏

第十三図



石仏に見る信者たちの庶民性が感じられるのである。

それから三年の寛永十八年に但称は五智山石仏を完成する。そのために伊豆国岩村において五智如来を彫刻したという。但称の弟子林貞の名は五智山石仏に見えるが、江戸時代の『江戸名所記』に

但唱木食の弟子念幸は都のひがし白川のほとり田中という所にして地藏並に二十五のぼさつをつくりて安置し……

とあって、弟子の念幸という名を挙げている。どれだけ信じられる伝承かわからぬが、京都市左京区田中の寺を一、二あつたがそれらしい仏像も石仏もないようである。

但唱は寛永十八年（一六四一）六月十五日寅刻に六十一才で示寂したというから、五智山石仏が造立された直後といってもよい。但称最後の作善が五智山石仏であったのも、奇しき縁のように思われる。如来寺墓地には安山岩製、高さ三メートルばかりの巨大な無縫塔が立ち、「仏性院満嶺但唱上人」の法名が拝される。

なお納骨堂内に保管する天部石像の首部も但称の作らしい。

## 六、結 語

樋口平大夫家次造立の五智山石仏群を四十年前に調べたことから縁を發して、私は平大夫の仏教篤信の事跡を、彼の遺したものを通じて追うて来た。彼は特殊なケースなのであろうが、あれだけの全国巡拝と石仏群造立、寺の再興を成しとげるには、熱烈な仏教信仰がなければならぬことはもちろんであるが、おそらく半生を要した時間的余裕がどうして得られたか、またそれには莫大な経済的負担を必要としたにちがいないが、その経済源は何にあったのであろうか。そういうことは一つも解明できなかった。平大夫のような篤信家の存在、その作善が、近世の歴史的事実として存したことを確認するにとどまった。

また彼がそのような生活に没頭することができたについて、多大の助力をした人々があったにちがいない。人間の生活は孤立して行い得るものではないからである。しかし平大夫の他に表面にあらわれたのは、石仏の作者但称上人とその石仏彫刻の弟子の林貞、さらに五智山の聖観音石仏の「願主岡村庄兵衛清之」だけである。岡村庄兵衛はたぶん平大夫に親近のよき理解者であろうと想像するばかりである。

樋口平大夫と但称の作善

江戸如来寺の但称についてはもっと記述しようとは準備はしていたが、紙数にも限度があるので、必要な範囲にとどめた。しかし樋口平大夫の作善の眼目となった五智山石仏群の作者であり、如来寺開山の木食行者但称上人の信仰心が、同じ江戸に住んでいた平大夫に大きい影響を与えたこと、この但称上人との出会いによって、五智山石仏群が成功したことはたしかである。以上、民間篤信家の姿を通して、江戸初期の歴史の一断面をうかがってみようとしたのである。

終りにこの研究に関して蓮華寺桑田善照師、如来寺遠賀亮達師、中尊寺千葉快恩師、白岩観音浜名豪賢師、篠崎四郎氏、天岸正男氏、久保仁平氏、藤川弦氏から受けた御厚意に感謝の意を表す。

(昭和四九・八)